

報告タイトル

習近平の台湾認識と統一促進政策  
Xi Jinping's perception of Taiwan and his push for unification

氏名(所属)

小笠原 欣幸 (東京外国語大学)  
OGASAWARA, Yoshiyuki (Tokyo University of Foreign Studies)

要旨(800字程度)

習近平政権発足から10年になる。習近平は権力の座についてほどなく台湾問題を先送りしない考えを表明し、自身の執政スローガンである「中国の夢」の中に台湾統一を位置づけ、台湾への圧力を強めてきた。習近平の本来の任期である10年という節目の年を迎えて、習政権の対台湾政策について一定の評価を示す時期にきている。

本報告は、最初に習近平の台湾認識を明らかにし、次に10年間の対台湾政策の具体的な展開を整理し、ソフトパワーによる台湾取り込みとハードパワーによる台湾抑え込みの2つの路線の矛盾を検討する。最後に習近平の対台湾政策は行き詰っているという評価を提示する。

習近平は早い段階の2013-14年に、馬英九の代理で北京を訪問した呉伯雄、蕭万長、あるいは連戦ら台湾の要人に向けて、その後の対台湾政策の核になる考え方を打ち出した。「兩岸一家親」「心靈契合」「運命共同体」などの概念が使われた文脈から、習近平が強い中国ナショナリズムの歴史観で台湾を解釈していることが浮かび上がる。

習近平は、最初は胡錦濤の「兩岸関係の平和的發展」(統一までのプロセスを重視する概念)を使っていたが、それでは統一は近づかないと考え、それを形骸化した。2014年からは胡錦濤が言及を控えていた「一国二制度による台湾統一」を前面に出し、「92年コンセンサス」の定義を狭めて馬英九を追い込み、2015年ついに国民党を取り込むことに成功した。

その結果、台湾の有権者が警戒感を高め2016年の政権交代につながった。蔡英文政権登場後は自ら中台の対話を閉ざし、台湾への統一圧力を強めた。それがさらに台湾側の中国離れを後押ししているのだが、習近平は台湾独立の動きを警戒し一段と強い行動に出ている。平和的統一の可能性はほとんどなくなり、それでも統一を進めようとするれば何らかの強制的な方法によるしかない。台湾では国民党の支持が弱まり、日米は台湾有事に備えて動きだしたことで、中国から見ての台湾の内外環境は厳しさを増している。